

## 清野茂教授の退任に想う

清野先生は、社会福祉学、そして特殊教育学の研究者、教育者として、また、実践者として偉大な業績と貢献を積み上げられている。

多くの研究業績のひとつには、『シリーズ 福祉に生きる 佐藤在寛』（1998 年）がある。そのシリーズの編者であった一番ヶ瀬康子先生は、「お読みになる人へ」と題するメッセージのなかで、「“福祉は『人』なり” という言葉があります。」と記している。

この言葉は、そっくりそのまま、清野先生のお姿をあらわす言葉といえる。

先生は、著書の「おわりに」で次のようにお書きになっている。

**彼の前半生と後半生は緊密な繋がりをもって私には思われる。彼が前半生で出会った人々との繋がり、長く続き、在寛は『温旧通信』への執筆、『門前語』の送付を続けることによって、それらの人々に函館での奮闘ぶりを伝えることを欠かさなかった。あたかも、在寛は変わりなく生きている、節を曲げてはいないというように。そのようなことから、著者はあえて、彼の前半生をも記述した。その記述にあたって、できるだけその原資料にあたり、それらを直接引用、紹介することにこころがけた。**

先生の「人と人との繋がり」への思い。そこには、繋がりを大切にし、そして温かく見守り続けられる先生のお姿がある。

「できるだけその原資料にあたり」には、研究者として科学的、客観的視点を持ち続けられる真摯な、そして厳しき先生がおられる。

先生は、また、人との出会い、学問との出会いについての不思議さを著書の「はじめに」で次のように書き記されている。

**私(清野)の故郷は北海道・函館市である。今から三五年程前、通学していた中学校の隣に函館聾学校があった。当時の聾学校は戦前からのものとは場所も違うが、これから述べようとする佐藤在寛がかつて院長、校長を務めていた函館聾学校(旧私立函館盲啞院、函館盲啞学校)であった。当時はどんな歴史をもった学校かとか、どんな人たちが築き、維持してきた学校かなど考えもしなかった。ただそこにあってだけで、学校同士の交流も全くなかった。札幌の大学に入り、ふとしたきっかけでアパートの近くにあった聾学校を見学し、それが聴覚障害児教育を専攻することにつながり、当時聾学校から排除されていた手話に関心をもつ中で、故郷函館の盲啞院長であった佐藤在寛という人物に出会った。不思議な巡り合わせのような気がする。私は昭和二十四年生れであるから、佐藤在寛とは七年間、函館の同じ空の下に暮らしていたことになる。もしかしたら、街のどこかで杖を片手に散歩している在寛に小さい私がすれちがっているかも知れない。**

「不思議な巡り合わせ」。それは、清野先生と私ども教職員、そして学生。さらには、先生のまなざしのもと多くの人々との出会いでもあった。そのすべてのものが先生に巡りあえたことに感謝している。心から申し上げたい。先生、ありがとうございました。

2015 年 3 月

清野茂先生を送る有志の会  
学科紀要編集委員会



## 清野茂教授年譜及び主要業績目録

### 【年 譜】

#### 学 歴 等

昭和 24 年 8 月 北海道函館市生  
昭和 47 年 3 月 北海道大学教育学部 卒業  
昭和 49 年 3 月 東北大学大学院教育学研究科心身欠陥学専攻修士課程 修了 教育学修士  
昭和 53 年 3 月 東北大学大学院 教育学研究科心身欠陥学専攻博士課程 単位取得退学

#### 学 位

昭和 49 年 3 月 教育学修士（東北大学大学院）  
「指話法導入に関する一考察 ―栃木校の語り、綴り、学力達成度の比較検討を  
ととして―」

#### 職 歴

昭和 52 年 11 月 大学設置審議会教員審査道都大学社会福祉学部専任講師  
昭和 53 年 4 月 道都短期大学経営学科専任講師（～昭和 54 年 3 月）  
昭和 54 年 4 月 道都大学社会福祉学部専任講師（～昭和 58 年 3 月）  
昭和 58 年 4 月 道都大学社会福祉学部助教授（～昭和 59 年 3 月）  
昭和 59 年 4 月 名寄市立女子短期大学生活学科児童専攻助教授（～平成 8 年 3 月）  
平成 2 年度 拓殖短期大学保育学科非常勤講師（～平成 10 年度）  
平成 8 年 4 月 市立名寄短期大学生活科学科児童専攻教授（～平成 14 年 3 月）  
平成 12 年度 日本福祉学院社会福祉士養成通信教育科非常勤講師（～平成 19 年度）  
平成 13 年 4 月 市立名寄短期大学生活科学科 学科長併任（～平成 15 年 3 月）  
平成 14 年 4 月 市立名寄短期大学生活科学科児童専攻教授（～平成 16 年 3 月）  
平成 15 年 4 月 市立名寄短期大学 学生部長併任（～平成 16 年 3 月）  
平成 16 年 4 月 市立名寄短期大学生活科学科児童専攻教授  
平成 18 年 4 月 名寄市立大学保健福祉学部社会福祉学科教授（～現在）

#### 学会及び社会における活動等

##### 学会活動

昭和 47 年 日本特殊教育学会会員（～現在）  
昭和 49 年 ろう教育科学学会会員（～現在）  
昭和 54 年 日本社会福祉学会会員（～現在）  
昭和 56 年 北海道社会福祉学会会員（～現在）  
昭和 62 年 北海道乳幼児療育研究会（～現在）  
平成 5 年 日本保育学会会員（～平成 18 年）  
平成 12 年 北海道社会福祉史研究会会員（～現在） 会長（平成 26～現在）  
平成 14 年 日本マカトン協会会員（～現在）

平成 16 年 日本地域福祉学会会員(～平成 19 年)

### 研究活動

- 昭和 56 年 第 1 回北海道新聞学術文化研究奨励金「へき地における障害幼児の障害の軽減・克服に関する実践的研究」研究代表者
- 昭和 57 年 昭和 56 年度文部省科学研究費補助金(奨励研究 (A)) 「過疎地における障害幼児の地域ケアの充実をめざす実践的研究」研究代表者
- 昭和 60 年 昭和 60 年度北海道科学研究費補助金「へき地における乳幼児健診の改善に関する研究」研究代表者
- 昭和 61 年 昭和 61～63 年度文部省科学研究費補助金(分担・代表者・小出真美) 課題番号 62530039「育児不安の実態と地域の育児機能向上の援助体制」
- 昭和 62 年 昭和 62 年度北海道ノーマライゼーション研究センター研究補助金「障害幼児をもつ母親への指導援助に関する研究」 研究代表者
- 平成 9 年 平成 7 年度～8 年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))課題番号 07610293「昭和初期聾啞教育と手話一口話論争」 研究代表者
- 平成 11 年 北海道ろうあ連盟・創立 50 周年記念文化スポーツ賞(文化部門) 著書『福祉に生きる 19 佐藤在寛』の出版による受賞
- 平成 12 年 平成 12 年度北海道ノーマライゼーション研究センター研究補助金(事例研究)「聾の両親から生まれた聾幼児の手話コミュニケーションの発達」 研究代表者

### 社会における活動等

#### 委員等

- 昭和 55 年 紋別市就学指導委員会委員(～昭和 59 年)
- 昭和 61 年 中頓別町 3 歳児検診 発達相談員・心理判定員(～平成 10 年)
- 昭和 62 年 障害者に関する名寄市行動計画推進委員会委員長(～平成 11 年)
- 平成元年 名寄市おもちゃライブラリー顧問(～平成 18 年)
- 平成 2 年 道北地域療育推進協議会副会長、同委員 平成 8 年まで副会長、以降は同委員(～平成 16 年)
- 平成 2 年 名寄地域療育推進協議会委員(～平成 15 年)
- 平成 3 年 社会福祉法人道北センター福祉会(精神障害者社会復帰施設経営法人) 評議員(～平成 14 年)、常任委員(平成 7 年～平成 8 年)
- 平成 4 年 名寄市社会福祉協議会評議員(～平成 9 年)
- 平成 4 年 6 月 名寄市社会福祉協議会総合福祉センター建設促進委員会委員長(～平成 4 年 12 月)
- 平成 5 年 名寄市手をつなぐ親の会相談役
- 平成 7 年 名寄市社会福祉協議会総合福祉センター運営準備委員会療育部会副部会長(～平成 8 年)
- 平成 7 年 北海道の福祉を考える懇話会委員(～平成 8 年)
- 平成 9 年 名寄市就学指導委員会委員(～平成 11 年)
- 平成 9 年 名寄市総合療育センター運営委員(～平成 13 年)

平成 9 年 社会福祉法人美深育成園（児童養護施設）理事（～平成 19 年）  
平成 9 年 10 月 名寄市障害者福祉計画策定委員会委員長（～平成 10 年 4 月）  
平成 13 年 名寄丘の上学園（知的障害者更生施設）苦情処理委員会第三者委員（～平成 19 年）  
平成 14 年 社会福祉法人名寄みどりの郷評議員（～現在）  
平成 23 年 名寄市保健医療福祉推進協議会委員（～平成 24 年）  
平成 24 年 名寄市障害者自立支援協議会委員（～現在）

### 講 師 等

昭和 54 年 紋別市情緒障害児療育事業講師（～昭和 59 年）  
昭和 55 年 北見保健所幼児教室（発達の遅れのある幼児と母親支援のための事業）講師（～昭和 60 年）  
昭和 55 年 中湧別町幼児教室講師（～昭和 60 年）  
昭和 55 年 知的障害児施設きたみ学園 短期療育事業母親教室講師（～平成 4 年）  
平成 12 年 名寄丘の上学園 職員研修会講師  
平成 14 年 日本マカトン協会主催マカトン法初級ワークショップ修了  
平成 15 年 日本マカトン協会主催マカトン法上級ワークショップ修了  
平成 15 年 日本マカトン協会主催マカトン法シンボルワークショップ修了

### 【主要業績 目録】

#### 編・著書等

昭和 57 年 4 月 『地域における障害児の障害の軽減・克服、発達の保障をめざす実践的研究 清野茂』清野茂、尾崎良寛、菅原康之、坂井智美、野呂幸子、塙留美子 北海道新聞社第 1 回学術文化奨励基金研究報告書 道都大学清野研究室  
昭和 57 年 12 月 「Ⅵ.障害児の言語発達と言語の機能」『障害児の言語指導と発達』清野茂（編著者）河添邦俊・長嶋瑞穂・北村晋一・鈴木秀悦・丸山美和子 総合労働研究所  
平成 6 年 7 月 「Ⅱ章 1.主流となった統合保育・教育」「Ⅲ章 1.ノーマライゼーションの姿」清野茂『サラダボールの国カナダ』小出まみ編著 ひとなる書房  
平成 10 年 12 月 『佐藤在寛 シリーズ福祉に生きる 19』（単著）大空社  
平成 12 年 10 月 「はじめに」「高橋潔の足跡」清野茂『手話讃美 手話を守りぬいた高橋潔の信念』川渕依子編 サンライズ出版  
平成 14 年 5 月 『手話・口話論争の時代と手話を擁護した人々～大阪市立聾唖学校・佐藤在寛・鈴木忠光～』自費出版・市立名寄短期大学・清野研究室  
平成 21 年 9 月 「第 4 章 2 節 北海道児童福祉のあゆみ」『北海道の歴史と福祉～北海道の開拓と福祉のあゆみ』北海道社会福祉史研究会

#### 学術論文

昭和 52 年 「早期指話法いかなる有効性を示しうるか―栃木校生徒の受容語彙、綴り正確度―」『ろう教育科学』19 巻 1 号 ろう教育科学会

- 昭和 53 年 「幼稚園における障害児保育の考察」(清野茂・埴留美子)『北海道私学教育研究協会研究紀要』第 46 号 北海道私学教育研究協会
- 昭和 53 年 「手話をめぐって」『道都短期大学紀要』第 12 号 道都短期大学
- 昭和 54 年 「指文字—その歴史と改良」『道都大学紀要—社会福祉学部—』第 2 号 道都大学
- 昭和 55 年 「ソ連邦の教育大学欠陥学部における指話法実習」『日本手話学術研究会論文集』第 2 号
- 昭和 55 年 「千歳市における障害児の療育・保育の発展」(清野茂・阿部哲美)『北海道社会福祉研究』第 5 号 北海道社会福祉学会
- 昭和 55 年 The Finger Spelling—Its History and Improvement Journal of Social Welfare in the Northern Region Vol.2 道都大学社会福祉学部
- 昭和 56 年 「北海道・網走支庁・西紋別地域の障害幼児の療育・保育の現状と課題」『北方福祉』第 3 号 道都大学社会福祉学部
- 昭和 57 年 「鈴蘭保育園における障害児保育実践—過疎地無認可保育園における障害児保育実践—」(中井一文・北原慶子・清野茂)『北方福祉』第 5 号 道都大学社会福祉学部
- 昭和 58 年 「過疎地における障害児の地域ケアと母子短期療育」『道都大学紀要』第 6 号 社会福祉学部
- 昭和 59 年 「北見地域における母子保健・障害幼児療育活動」(清野茂・仲野加代子・松井恵美)『北方福祉』第 8 号 道都大学社会福祉学部
- 昭和 59 年 「カナダの障害児・者教育・福祉事情」『北方福祉』第 8 号 道都大学社会福祉学部
- 昭和 60 年 「地域における障害幼児への療育的集団指導に関する研究—北見保健所『幼児教室』における三年間の母子支援活動を事例として—」(清野茂・仲野加代子・小島愼)『地域と住民』第 3 号 市立名寄短期大学道北地域研究所
- 昭和 61 年 「人と人を結ぶ障害児教育実践をつくり、広げよう」『北海道の教育 86 年版』北海道合同教育研究集会実行委員会
- 昭和 63 年 「道北過疎地域における乳幼児検診と障害児療育の現状」『地域と住民』第 6 号 市立名寄短期大学道北地域研究所
- 昭和 63 年 「名寄市における母親の生活と子育て」(田中義和・小出まみ・木村純・清野茂)『道北の子育てとその援助システム』昭和 61~63 年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書
- 平成元年 「障害児早期療育における母親への指導援助に関する研究」(清野茂(研究代表者)・喜多祐荘・佐々木明員・千葉裕子)『北海道ノーマライゼーション研究』北海道ノーマライゼーション研究センター
- 平成 2 年 「名寄地域における障害児療育の現状と課題」『地域と住民』第 8 号 市立名寄短期大学道北地域研究所
- 平成 4 年 「過疎地域における早期療育システム推進のための課題」『地域と住民』第 10 号 市立名寄短期大学道北地域研究所
- 平成 2 年 「障害児早期療育における母親への指導援助に関する研究」『ノーマライゼーションへの道 Part II』北海道ノーマライゼーション研究センター
- 平成 4 年 「北海道における早期療育システムに関する調査研究」(阿部哲美・大江美和子・小



- 野澤秀晃・喜多祐荘・鈴木真知子・清野茂・他 9 名)『北海道ノーマライゼーション研究』NO.4 北海道ノーマライゼーション研究センター
- 平成 4 年 「地域で学び、地域と歩む」『北海道保健婦のつどい第 15 回報告書』北海道保健婦のつどい運営委員会
- 平成 5 年 「早期療育システム整備状況の現状と課題」(阿部哲美・村上勝彦・小野澤秀晃・大江美和子・喜多祐荘・鈴木真知子・清野茂・他 5 名)『北海道ノーマライゼーション研究』NO.5 北海道ノーマライゼーション研究センター
- 平成 5 年 「佐藤在寛と私立函館盲啞院」『紀要』第 25 巻 市立名寄短期大学
- 平成 6 年 「私立函館盲啞院長・佐藤在寛—その東京時代—」『地域と住民』第 12 号 市立名寄短期大学道北地域研究所
- 平成 7 年 「私立函館盲啞院長・佐藤在寛と昭和初期聾啞教育」『ろう教育科学』第 36 巻 4 号 ろう教育科学会
- 平成 7 年 「佐藤在寛と昭和初期聾啞教育—純口話法批判者、手話擁護者としての佐藤在寛—」『紀要』第 27 巻 市立名寄短期大学
- 平成 8 年 「知的障害者の地域移動に関する研究—知的障害者はなぜ故郷を離れなければならないか—」『地域と住民』第 14 号市立名寄短期大学道北地域研究所
- 平成 9 年 「昭和初期手話 - 口話論争に関する研究」『紀要』第 29 巻 市立名寄短期大学
- 平成 11 年 「ある聾啞学校教師の生涯—鈴木忠光と昭和の聾啞教育、聾啞運動」『紀要』第 31 巻 市立名寄短期大学
- 平成 12 年 「ある聾啞学校教師の生涯・補遺」『紀要』第 32 巻 市立名寄短期大学
- 平成 12 年 「地域障害者計画に関する研究—名寄市を事例に—」『地域と住民』第 18 号 市立名寄短期大学道北地域研究所
- 平成 12 年 「美深町仁宇布における山村留学の調査研究」(中島常安・大坂祐二・守村洋・清野茂・他 3 名)『地域と住民』第 18 号 市立名寄短期大学道北地域研究所
- 平成 13 年 「大阪市立聾啞学校の歴史的研究」『紀要』第 33 号 大阪市立聾啞学校
- 平成 13 年 「聾の両親から生まれた聾幼児のコミュニケーションの発達」(清野茂・堀池剛・玉手順子)『北海道ノーマライゼーション研究』NO.13 北海道ノーマライゼーション研究センター
- 平成 13 年 「昭和初期手話 - 口話論争と函館盲啞院—文献と写真、聞き取りで探る戦前の聾啞教育—」『ろう教育の明日を求めて』第 12 集 ろう教育の明日を考える連絡協議会
- 平成 14 年 「大阪市立聾啞学校教師たちの手話についての考え方」(共著; 上野益雄・野呂一・清野茂)『つくば国際大学紀要』第 8 号 つくば国際大学
- 平成 15 年 「あるろうあ青年の生活史—その自己実現の軌跡—」(平成 13 年度ゼミ生との共著)『地域と住民』第 21 号市立名寄短期大学道北地域研究所
- 平成 17 年 「あるろう教師、その実践と人生—大阪市立聾啞学校教諭・廣間ひでについて」『紀要』第 38 巻市立名寄短期大学
- 平成 17 年 「知的障がい者の施設入所と脱施設化」『紀要』第 38 巻 市立名寄短期大学
- 平成 17 年 「梓溪生・樋口長市の人物像と教育に関する一考察 —1920 - 1930 年代のいくつかの事柄をとりあげて—」『ろう教育科学』46 巻第 2 号ろう教育科学会
- 平成 19 年 「知的障がい者のエンパワメントに果たしたアートとして「さをり織り」の役割」

- 『地域と住民』第25号 名寄市立大学道北地域研究所
- 平成19年 「昭和初期聾啞教育における高橋潔と佐藤在寛」『北海道社会福祉史研究』第8号  
北海道社会福祉史研究会
- 平成21年 「知的障害者の地域移行の現状と課題—先進的施設の事例調査を通じて—」清野  
茂、忍博次『地域と住民』第27号 名寄市立大学道北地域研究所
- 平成21年 「施設から地域生活への移行プロセスと支援のあり方に関する研究」（橋本伸也・  
小林繁市・山崎忠顕・阪口光男・松川敏道・忍博次・清野茂・白戸一秀）北海道  
社会福祉協議会報告書 北海道社会福祉協議会
- 平成21年 「知的障害者の地域移行・自立支援の問題」（忍博次・清野茂）『発達障害研究』第  
31巻第4号 日本発達障害学会
- 平成25年 「辻本繁『篠崎先生小傳』について」『北海道社会福祉史研究』第9号 北海道社会  
福祉史研究会

## 翻 訳

- 昭和52年1月 「ろう幼児の家庭教育のための指話法の利用」『ろう教育科学』第18巻4号 ろ  
う教育科学会
- 昭和55年8月 「盲ろう児の教育体系について」『ソビエト心理学研究』27・28号
- 昭和59年3月 「指話とそのよみとり技術習得のための課業と訓練のシステム」名寄女子短期  
大学『紀要』第17号 名寄女子短期大学
- 昭和60年3月 「ソ連邦におけるろう児の発音教育の歴史と原理」名寄女子短期大学『紀要』  
第18号 名寄女子短期大学
- 平成6年9月 「第2章 精神遅滞の分類」『障害児理解の到達点—ジグラー学派の発達論的  
アプローチ』田研式出版

## その他 学会発表

- 昭和50年8月 「聴覚障害児の対人行動の発達」（共同；清野茂・黒田吉孝・坂本幸）『聴覚障  
害児教育国際会議論文集』（聴覚障害者教育 福祉協会 と聴覚障害児教育国際  
会議実行委員会 主催）
- 昭和50年9月 「聴覚障害児の対人行動の発達その1」（共同；清野茂・黒田吉孝・坂本幸）  
日本特殊教育学会第13回大会発表論文集 日本特殊教育学会
- 昭和50年9月 「聴覚障害児の対人行動の発達 その2」（共同；黒田吉孝・坂本幸・清野茂）  
日本特殊教育学会第13回大会発表論文集 黒田吉孝、坂本幸、清野茂
- 昭和50年9月 「聴覚障害児の対人行動の発達 その3」（共同；坂本幸・清野茂・黒田吉孝）  
日本特殊教育学会第13回大会発表論文集 日本特殊教育学会
- 昭和51年8月 「栃木校生徒の受容語い」ろう教育科学会第18回大会 ろう教育科学会
- 昭和51年9月 「聴覚障害児の対人行動の発達 その4」（共同；清野茂・黒田吉孝・坂本幸）  
日本特殊教育学会第14回大会発表論文集 日本特殊教育学会
- 昭和51年9月 「聴覚障害児の対人行動の発達 その5」（共同；黒田吉孝・坂本幸・清野茂）  
日本特殊教育学会第14回大会発表論文集 日本特殊教育学会
- 昭和51年9月 「聴覚障害児の対人行動の発達 その6」（共同；坂本幸・清野茂・黒田吉孝）



- 日本特殊教育学会第14回大会発表論文集 日本特殊教育学会
- 昭和53年10月 「聴覚障害児の言語生活の実態—ある児童集団の使用手話単語」 日本特殊教育学会第16回大会発表論文集 日本特殊教育学会
- 昭和54年9月 「千歳市における障害幼児の療育・保育の発展(Ⅰ)」(共同; 清野茂・阿部哲美) 北海道社会福祉学会第18回大会 北海道社会福祉学会
- 昭和54年9月 「千歳市における障害幼児の療育・保育の発展(Ⅱ)」(共同; 阿部哲美・清野茂) 北海道社会福祉学会第18回大会 北海道社会福祉学会
- 昭和55年11月 「過疎地における障害幼児の療育・保育の現状と課題」 日本社会福祉学会第28回大会発表要旨集 日本社会福祉学会
- 昭和56年10月 「過疎地における障害幼児療育活動のこころみ」 日本社会福祉学会第29回大会発表要旨集 日本社会福祉学会
- 平成元年11月 「道北地域における乳幼児健診と障害乳幼児療育の現状」 北海道乳幼児療育研究会第1回大会 北海道乳幼児療育研究会
- 平成5年10月 「私立函館盲啞院長・佐藤在寛と手話擁護論」 日本特殊教育学会第31回大会発表論文集 日本特殊教育学会
- 平成6年8月 「佐藤在寛と昭和初期聾啞教育」 ろう教育科学会第36回大会資料集 ろう教育科学会
- 平成7年9月 「昭和初期聾啞教育と手話—口話論争(1)」 日本特殊教育学会第33回大会発表論文集 日本特殊教育学会
- 平成8年9月 「昭和初期聾啞教育と手話—口話論争(2)」 日本特殊教育学会第34回大会発表論文集 日本特殊教育学会
- 平成10年9月 「昭和初期聾啞教育と手話の事績を中心に—口話論争(3)—鈴木忠光」 日本特殊教育学会第36回大会発表論文集 日本特殊教育学会
- 平成11年10月 「昭和初期聾啞教育と手話—口話論争(4)—鈴木忠光と大阪市立聾啞学校—」 日本特殊教育学会第37回大会発表論文集 日本特殊教育学会
- 平成12年9月 「昭和初期聾啞教育と手話—口話論争(5)—大阪市立聾啞学校長・高橋潔と全国盲啞学校長会議—」 日本特殊教育学会第38回大会発表論文集 日本特殊教育学会
- 平成13年9月 「大阪市立聾啞学校教師たちの手話観」(共同; 上野益雄・野呂一・清野茂) 日本特殊教育学会第38回大会発表論文集(CD-ROM) 日本特殊教育学会
- 平成13年9月 「東京のろう教育史研究 明治大正のろう学校教員養成機関」(共同; 野呂一・上野益雄・清野茂) 日本特殊教育学会第39回大会発表論文集(CD-ROM) 日本特殊教育学会
- 平成14年9月 「昭和初期大阪市立聾啞学校の教師に関する研究(1) —大阪市立聾啞学校の聴覚障害教員—」(共同; 清野茂・野呂一・上野益雄) 日本特殊教育学会第40回大会発表論文集 日本特殊教育学会
- 平成14年9月 「東京のろう教育史研究(2)」(共同; 野呂一・上野益雄・清野茂) 日本特殊教育学会第40回大会発表論文集 日本特殊教育学会
- 平成14年9月 「雑誌『聾啞の光』にみる聾教育—『聾啞の光』の成立過程—」(共同; 上野益雄・野呂一・清野茂) 日本特殊教育学会第40回大会発表論文集 日本特殊教育学会

#### 教育学会

- 平成 15 年 9 月 「昭和初期大阪市立聾唖学校の教師に関する研究(2) ―女性教師・廣間ひでの著作をてがかりに―」(共同; 清野茂・野呂一・上野益雄) 日本特殊教育学会第 41 回大会発表論文集 日本特殊教育学会
- 平成 15 年 9 月 「東京のろう教育史研究(3)―私立浜松聾唖学校の手話による国語教育―」(共同; 野呂一・上野益雄・清野茂) 日本特殊教育学会第 41 回大会発表論文集 日本特殊教育学会
- 平成 15 年 9 月 「雑誌『聾唖の光』にみる聾教育(2)―雑誌の内容と手話の状況―」(共同; 上野益雄・野呂一・清野茂) 日本特殊教育学会第 41 回大会発表論文集 日本特殊教育学会
- 平成 16 年 9 月 「T.H.ガローデットの手話に対する考え方」(共同; 上野益雄・野呂一・清野茂) 日本特殊教育学会第 42 回大会発表論文集 日本特殊教育学会
- 平成 17 年 8 月 「昭和初期聾唖教育における高橋潔と佐藤在寛」第 14 回全国聴覚障害教職員シンポジウム函館大会資料

#### その他 聞き取り資料・実践記録 等

- 昭和 57 年 9 月 「広い大地の尚也と尚起」『北方福祉』第 5 号 道都大学社会福祉学部
- 昭和 58 年 9 月 「私たちのゼミ卒論指導 (2) 地域に学び、地域にとりくむ協働活動」『北方福祉』第 7 号 道都大学社会福祉学部
- 昭和 63 年 4 月 「ともに生きるまちづくりをめざして＝障害をもつ人、家族、関係者の声に学ぶ＝」(清野茂・福光哲夫・横山正範) 名寄障害者地域福祉研究会
- 平成元年 12 月 「ともに生きる＝誰でもがしあわせを感じるまちづくりを＝」(清野茂・芦沢雅子・佐藤喜代枝・福光哲夫 編著) 障害者に関する名寄市行動計画推進委員会
- 平成 5 年 3 月 「「国連・障害者の 10 年」最終年記念誌・ともに生きる」(清野茂・芦沢雅子・佐藤喜代枝・福光哲夫) 障害者に関する名寄市行動計画推進委員会
- 平成 7 年 4 月 「聞き書き・鷺巣俊誠氏―障害児教育・地域福祉・自然保護」『地域と住民』第 13 号市立名寄短期大学道北地域研究所
- 平成 10 年 5 月 『障害者の日・メッセージ 97 報告書』障害者に関する名寄市行動計画推進委員会編著
- 平成 13 年 4 月 「『福祉に生きる 19 佐藤在寛』補遺のために」(清野茂・玉手順子・玉手裕・玉手千晶)『地域と住民』第 19 号 市立名寄短期大学道北地域研究所
- 平成 15 年 3 月 「聞き書き・ぼくの人生について―知的障害者入所施設利用者 YH 氏の自分史と提言」『地域と住民』第 13 号 市立名寄短期大学道北地域研究所
- 平成 23 年 3 月 「学生とともに地域で学んできたこと(1) ―オホーツク・紋別で」『地域と住民』第 29 号 名寄市立大学道北地域研究所
- 平成 24 年 3 月 「学生とともに地域で学んできたこと(2) - 児童専攻、サークル、地域実践のこと」『地域と住民』第 30 号 名寄市立大学道北地域研究所

## 清野茂教授最終講義 レジューメ・最終講義の様子

### I. 最終講義レジューメ

15.2.14

#### 最終講義概要

#### 31年の教員生活を振り返って

清野 茂

#### お詫びと御礼

#### 31年を振り返る前に

名寄に移る前に道都大学という社会福祉学部を持つ大学に採用され、1年は北広島の系列の短大に、5年間は紋別に新設された社会福祉学部で最初の職場であったこの大学で20代の終わりから30代半ばにかけて教員生活を送り、学生、地域の方々から教師としての多くを学んだ。担当科目は、心身障害者福祉論、障害児教育、障害児心理

#### 研究活動

#### 障害児教育、障がい者福祉を専門領域とする大学教員となったきっかけについて

大学2年生の頃のある出来事。ろう教育との出会い。どうして手話を使わない

手話法を導入した教育について研究したい、東北大学の大学院へ。聴覚口話法の全盛期。手話・指文字の研究をするが、指導してくれる教員はいない。助手の坂本さんが宮城県ろうあ協会の関係者に働きかけ、両親ろうのろう幼児の身振り言語の発達を観察するための保育グループを作ってくれた。

当時のろう学校は手話禁止。大学でも手話研究はタブー

たくさんのろう学校を見学してまわるが、読みとりにくい相手の口もとに注意を集中しながら苦しそうに声をだしながら授業を受ける子どもの姿が

どうして手話を使わないのかとずっと思い続け、手話・指文字の効果にふれた外国の文献を読む。日本の数か所で行われていた指文字を使った教育、栃木県宇都宮ろう学校のとりくみ・・・宮城県内では愛澤先生手話を取り入れ、校長から転勤を迫られる。転勤先の小牛田ろう学校で重複の子どもにサインと指文字を導入

「早期指話法はいかなる有効性を示しうるか」ろう教育科学 翻訳何本か

ろう幼児の家庭教育のための視話法の利用  
挫折感を味わいながら、新設の福祉系大学へ

それでも手話に関する研究も細々と続け 「手話をめぐって」(1978) ろうあ児施設で用いられている手話の調査―室蘭の専任手話通訳者の方の援助いただき、地域の手話との異同を調査 「指文字―その歴史と改良」(1979) 指文字の歴史について論じたもの

## 大学教員の役割は何かを考え―教育・研究活動・地域活動

### 地域の療育活動 オホーツク地域での療育活動

紋別へ赴任してとりくんだこと―地域のことを知ろう―図書館で「紋別市史」を読み、地元新聞を読む、市議会に傍聴に 障害児教育・障害者福祉を選考する大学教師としての役割は何か・・・市役所、保健所、幼稚園、小学校(ことばの教室) 家庭相談員尾崎先生に会う―知的障害、発達障害の子どもの療育の場がない 作りたいので応援してほしい 療育活動―学生を誘って活動に参加 「アブラハムの会」 北海道新聞より第1回学術文化研究奨励金 100 数十万(1981) 上湧別町、北見保健所、網走市への支援  
議会傍聴に行って中井一夫議員と知り合いになる―鈴蘭保育園の障害児保育のとりくみ  
地域の親、保育者、教師、保健婦、学生で紋別障害児教育研究会 参加者は雄武から遠軽、佐呂間まで7市町村に

### 名寄市立女子短期大学の教員になって―めざした教員としてのとりくみ

5年間過ごした紋別の学生、地域の方々に申し訳なさを感じながら、児童専攻新設なった1984年、名寄に 地域に根ざした教育、地域に開かれた大学づくり 美土路学長  
心理学、障害児心理学、乳幼児心理学、青年心理学  
しばらく手話、ろう教育に関する研究から離れる  
地域の障害幼児、親支援の活動・・・様々な人たちとの協働

### 名寄での研究活動

早期療育活動に関わりながら道北の実態調査、また、療育、保育のあり方をめぐって研究を進めていたが・・・道北の母子保健、療育活動・・・町村保健婦の方を訪ねて、離島にも

どうしても「ろう教育と手話について」の研究をとという大学生の頃の思いが湧いてくる。どう考えてもおかしいろう教育に異論を唱えた人はいないのかと、北海道のろう学校の歴史について調べていると、函館聾学校が私立函館盲啞院と呼ばれていた時代、佐藤在寛という院長がいて、手話を排除せずに手話はろう者の母国語であると主張していたことを知り、調べ始める。彼につながる手話擁護の校長、教員の足跡を訪ねて 函館、帯広、札幌、大阪、大津、東京、金沢、神奈川、千葉・・・1993年に初めてのろう教育史関係の論文 「佐藤在寛と私立函館盲啞院」…シリーズ福祉に生きる「佐藤在寛」(1998・大空社) ろう者、教員、福祉関係の方々読んでくれ、(著者割引で)数十冊単位で買ってくれる方も 北海道ろうあ連

盟創立 50 周年記念文化・スポーツ賞の文化部門の受賞—平中忠信氏とともに

本を読んで、わざわざ東京から名寄まで会いにきてくれる方も 野呂一氏(日本聾史学会の役員・中野区職員)・・・上野益雄先生(筑波大学→つくば国際大学)との出会い 北海道のろう者との交流 大阪市立聾学校の資料庫に 10 年近く通う 科研費も申請し、採択される 高橋潔校長の遺族との交流—川渕依子氏(手話讃美・2000)、高橋千秋氏 中根伸一氏(札幌ろう史研究会)— 函館聴覚障がい者協会、函館盲啞院の卒業生 佐藤アイさん

障害者アートへの関心 横井寿之先生 さをり 各地の障害者アートのとりくみを訪ねて

## 地域活動—

名寄でも「まちに出て」いろいろな方たちと知り合う—児童専攻田中義和先生のサポート 名寄手話の会—福光哲夫氏(二人のろうのお子さんの親)、六団体主催の障害児教育、障害者福祉をテーマにした映画会、子ども会、名寄幼稚園の芦沢雅子先生、名寄地区特殊学級宿泊訓練への参加—佐藤喜代枝先生との出会い、親の会の方々、おもちゃライブラリー(名寄婦人団体連絡協議会) これらの方々とともに社協主催の「ふれあい広場」が始まった頃、参加私とともに学生もいろいろな場で学んでいく

療育の場づくり 言語、情緒障害の幼児教室はあったが、知的障害幼児の療育の場はなく、親たちと運動

## 障害者に関する名寄市行動計画推進委員会(1987)

10 数年続いた活動 障害者団体、親の会、福祉、教育、行政関係者

障害者の日ふれあいフォーラム(1989)・翌年から「障害者の日・メッセージ 1990～」

## サークル活動 教育活動であり、地域活動であり

障害児と遊び、親たちにレスパイト支援を「子ども会」—市内幼稚園の先生、母親、学生—子ども会サークルの活動

学生に会わせたい地域の人たちがたくさんいる(文明先生)

手話サークル 地域の手話の会、森さんはじめ協会のメンバーの支援、ろう青年と学生の交流を通して障害者理解が深まった 手話合宿—福光純さんの仲間が札幌から参加 手話検定の資格を一佐久間さん夫妻はじめ地域のろう者、手話の会の支援を受けて

## 名寄での教育活動 短大時代—

児童専攻の教職免許、保育士資格養成課程の変遷に合わせ、またも担当科目変わる

基礎科学演習、生活科学演習 印象に残っているのは演習科目

地域に根ざした教育を、地域に開かれた大学をめざして それぞれがテーマをもって

差別に向き合い、人権を保障する 当事者に目を向け、学ぶ

二人一組で、施設、福祉団体の活動に参加

障害者に暮らしやすいまちになっているか 点検活動、盲人用の立体コピー地図作り

障害者用トイレ全点検・・・毎年ゼミ集録を発行

ろうの祖父の生涯を3万2千字のレポートにまとめた学生のこと 学長賞論文に

まちに出ることは人と出会うこと 障害当事者、家族、ボランティア、福祉、保育、教育関係者 その方たちの教育力

訪ねてくる昔の卒業生が懐かしがって語ることは・・・

保育士養成が始まり

カリキュラムの過密化により、平日の地域での活動難しく、土、日の活動へ

### 名寄市立大学保健福祉学部開設後

4大社会福祉学科に配置換え、またまた、担当科目の変更

教育と研究の統一を志向して、かつて担当していた障害者福祉論、障害児教育学を担当

かつてに担当できるというわけではない 教員審査を受け、研究業績の審査を受けなければならない。養成カリキュラムが変更の度に審査のストレス 教職も社会福祉士養成も

4大化をひかえ、短大・生活科学(2004)、児童(2005)で「障害者福祉論」の授業を新設 生活科学専攻最後の年に向け2年間—2年生単位にならなくても受けたいと聴講

### 授業をつくる—

障害児教育学 障害者福祉論 自らの研究、自らが足を運んで確かめた内容を取り入れた授業を心がける 学会に出張した際には足を伸ばして施設等での聞き取り

これまでの研究活動、地域活動で得たものを授業に

『授業通信』の発行 10数年分の通信を読み返し思い出にひたる

知力・体力・気力の低下する中での9年間

名寄での31年、大学教師としての37年間を振り返り、多くの人に支えられてきたという思いと感謝の念

名寄の自然にも包まれ、助けられ

これからのこと



## Ⅱ. 最終講義の様子

清野茂先生の最終講義の様子を掲載するにあたり、本学教員であり卒業生でもある江連崇先生より、寄稿をいただきました。ここに掲載させていただきます。(編集委員会)

### 「最終講義と清野先生との思いで」

江連 崇  
(社会福祉学科教員)

最終講義の準備をしているとき、企画担当者であった本学の教員が清野先生に招待者の相談にいったところ「そんな大々的にやらなくていい、ただ手話通訳はつけてくれ」と言われたそう。とても先生らしい言葉だと感じた。

清野茂先生の実最終講義は 2015 年 2 月 14 日(土)に名寄市立大学本館で行われた。学生、卒業生、教職員だけでなく先生がこれまで関わってこられた多くの方々が来場した。私自身、先生の講義を学生時代に受けていたことから先生の淡々とした口調の、でもユーモア溢れる講義をととても懐かしい気持ちで聞いていた。

最終講義では先生とろう教育との出会いに始まり、大学院生時代の研究と挫折、初めて大学教員となった紋別時代の地域活動、そして名寄での教員生活とろう研究の再開と、先生のこれまでの 40 年以上の歩みを振り返られた。その中で、先生がろう教育に関心をもつきっかけとなった「ある出来事」についても話が合った。それは先生が大学 2 年生のとき見学にいった、ろう学校の運動会の出来事であった。運動会後、校長先生が生徒の前で総評を行っていたが、それは手話ではなく音声言語での話であり、生徒の顔を見ても到底その話を理解しているようにはみえず、とても苦しそうな表情をしていたという。その異様な光景が清野先生には衝撃だったという。口話法推進であったこの当時、この空間に疑問を感じるができる人はそう多くないとおもう。

また最終講義では先生の授業で毎回配られる「授業通信」も資料として配られた。この「授業通信」には前回の授業でのリアクションペーパーに書かれた何人かの学生の感想や疑問などが記載されている。毎回授業の前半でその文章を読み上げ、学生の感想に丁寧に答えていたことを今でも思い出す。私が教員として本学に戻ってきた後、先生と食事をしたとき授業方法についての話になったことがあった。先生は「言葉ではうまく伝えられない学生でも文章で表現させるとびっくりするぐらい色々なことを書いてくれる」と楽しそうに仰っていた。

先生のこれまでの歩みを聞いていて、その行動は一貫して、優しさに溢れていると思う。

私自身、あまり大学に来る学生ではなく先生には色々ご迷惑をお掛けしたことがあったが、卒業論文の作成にあたり清野先生の研究室を訪れると嫌な顔もせず、ほうじ茶をだして相談に乗ってくれて、いろいろな文献もお借りし、毎回楽しい話を聞くことができた。

それぞれの学生にあった教育を常に考え、労力を惜しまないその姿勢を最終講義をとおして改めて感じた一日だった。



（清野先生の最終講義の一コマ）